豊明希望チャペル礼拝

2024／5／5

「大きな恵みが彼らの上に」

使徒の働き 4：32～37

この使徒の働きを書いているルカは、教会の会員数や、財政、組織を、献金の具体的な内容や人の名前に言及して詳しく述べます。

今日の 4:32 から、8 章(～8:4)までの長さでそれを語りますから、もしかしたら、これは、使徒の働きを書いた一つの目的で、いわば最初の教会の姿を具体的に、数字や、そこで起きた、良い事も悪いことも詳細に記録して、後の教会の学びとして欲しい、参考にして欲しいと願ったのではないかと思います。

ちなみに簡単にまとめると。数と、財政、組織の面にそれぞれ触れていて、以下の通りです。

数(の面では)：受洗者数 3000(男)人(2:41～)という具体的な数字。

財政(の面では)：献げ物の、地所を売ったこと(4：32～)、また、アナニアとサッピラ(5:1～11)の例。

組織(の面では)：信徒間の苦情(6:1)と、リーダー(牧会)担当社の擁立(ようりつ)、で、おもにステパノ(リーダー6:8～8:40)のこと。などです。

今日は、豊明希望チャペルは、くすしくも教会総会ですが、おそらく、この長さから、秋くらいまで教えられることになりますが、教会はいかにあるべきかと言うことを覚えながら、しばらく、考え、教えられてまいりたいと思います。

今は日本に帰られている、ウィクリフの宣教師の、福永夫妻（1995 年パプアニューギニア着任）を個人的も私はよく知る者の人ですが、彼は、直接的な、宣教の働きではなく、宣教師の家族の子供たちの教育のためにインドネシアに遣わされました。宣教地には、数機の飛行機のためのパイロット、整備技師、聖書翻訳に使うコンピューターがいつ壊れても直せるように、コンピューター技師、そして、宣教師の子供たちも未開の地に一緒に行くのですから、福永師は、北海道大学を出られて、中学の先生で、奥様は高校の先生でしたら、その賜物を用いて、その宣教師達の子弟教育のために働いたのです。日本に帰ってこられて、宣教報告の際、私たちの前で、透明のカップを出して、ポケットから砂糖で包んだおはじきに似た、色とりどりのチョコレートを取り出しまして、一粒一粒コップに入れはじめました。この黄色の粒はコンピューター技師、この赤い粒は大工さん、この青い粒は宣教師達のために現地に遣わされているお医者さん。そして、一杯になったコップを高くあげて、「綺麗でしょ」と言われました。そして、これがウィクリフの組織ですと御説明なさいました。専門家が、それぞれの賜物を神さまにささげて、協力して奉仕をしているのですと。

それは、この豊明希望チャペルの教会の姿でもあります。たとえば礼拝での奏楽者としての奉仕をされておられる方々は、努力の末に獲得したその業を教会の必要のために捧げておられる方々です。奏楽には長年の努力と、日々との努力があり、司会、祈りも、誰でも出来る事ではありません。もちろん、献金という面では、ときに継続して、ときに大きく捧げられています。献金と言うことでは、それに伴う会計の奉仕、お花、これらも、会計事務にしても、お花にしても資格や専門的知識が必要で、ときに、会社の仕事の延長のような面もあります。そして、掃除や椅子並べ。繰り返し時間をとられる奉仕です。週報作り、いちいち、新しく来られた方や、送迎や、問題をかかえておられる方々への見えない奉仕を含めば、ここでは、言い切れないたくさんの事があります。たとえば、奏楽は、私の好きな音楽家のバッハも教会の奏楽者でした。前にお話ししたと思いますが、医者であるシュバイツァー博士もそうでした。そのすぐれた賜物を、惜しげなく、教会の働きのために捧げて、その教会奉仕の延長線上に、大音楽家への道があり、ノーベル平和賞への道がありました。しかし、その中核には、いつも教会の奉仕があったのです。

今日は、兄弟姉妹が、神さまに、そして教会に、犠牲を払って、ささげておられる場所であるとも言えるのだと思います。最初の聖句を読みます。

「4:32 さて、信じた大勢の人々は心と思いを一つにして、だれ一人自分が所有しているものを自分のものと言わず、すべてを共有していた。」

「信じた大勢の人々は心と思いを一つにして、」とは、一つには、クリスチャンは、「信じた」の次には、「奉仕」が、必然として来ると言うことを意味します。それは、信じた人の心には、神の愛が注がれるからです。理解するからです。ですから、その愛を隣人に捧げようという心が生まれるからです。

そして、「心と思いを一つにして」とは、その愛から生まれる、寄り添う心、共感する心がそこに生まれていることを意味します。隣人に、また、兄弟姉妹に寄り

添うとき、その喜びも苦しみも、家族のように共有しようと心がけという事です。
　それで、「だれ一人自分が所有しているものを自分のものと言わず、すべてを共有していた。」と、家族が、食べ物も、あらゆる物も共有するように、すなわち、家族となるということを言っているのです。そして、ルカはこう書きます。
　「4:33 使徒たちは主イエスの復活を大きな力をもって証しし、大きな恵みが彼ら全員の上にあった。4:34 彼らの中には一人も乏しい者がいなかった。地所や家を所有している者はみな、それを売り、その代金を持って来て、4:35 使徒たちの足もとに置いた。その金が、必要に応じてそれぞれに分け与えられたのであった。」
　「使徒たちは、主イエスの復活を大きな力をもって証しし、大きな恵みが彼ら全員の上にあった。」とは、使徒達が、復活の福音を説いたことを言っているわけで、その御言葉に励まされた、神さまから慰めを受けたことを示しています。すなわち、それは、「御言葉共同体」というべきもので、私たちが、礼拝で、あるいは祈祷会で、また、日々のディボーションで、御言葉に励まされて生きている共同体が、教会である事を言っています。
　そして、より具体的には、教会はこうなったと報告します。すなわち、「4:34 彼らの中には、一人も乏しい者がいなかった。地所や家を所有している者はみな、それを売り、その代金を持って来・・」たと。金銭あるいは物で助け合うことをしたということです。
　教会の中で、互助組織をつくる教会がありますが、この精神を反映していると思います。教会によっては、互助資金をプールしておき、牧師などの判断で、それを適切に分け合うと言うことです。ただし、多くの教会では、先にあげた互助組織はあまりなく、少なくともあまり公には聞くことはありません。
　こういう例はあります。組織的なことだけでなくて、例えば、その人が商売をしていれば、そこから物を買うようにします。ただ、商売を助けたいと行ったとしても、売る方も、教会員だからタダにしましょう、値引きしましょうということになり、そうなると、今度は、申し訳なくて、買いにいけなくなるということを見てきました。実は、ルカは、今見た、34 節 35 節の、そのことの素晴らしさと共に、危険も次の章でのエピソードで見ます。また、6 章では、お金の配分のことで、ある人は多くて、ある人は少ないと、不公平だと思う人たちが出て、問題になって、使徒達が、本来の宣教の働きに支障をきたしたと書いてあります。
　この問題は、次回に教えられたいと思いますが、ルカがその問題を詳細に書いてくれてあるおかげで、気を付けるべき点はいつも注意し、ときには、一定の節度を持って、しかし、痛みと苦しみに寄り添い、その精神、その心は、大切にすべきことです。クリスチャン同士が、寄り添い祈るべき事を、それこそ教会の教会たるゆえんだと、教会の精神だと心得、心を込めて互いに仕え、奉仕をすることを、教会の奉仕の基本としたいと思うのです。
　さて、ルカは、今日のところで、5：1 からあげる、良くなかった例に先立って、良かった例をあげます。バルナバという人の例です。
　「4:36 キプロス生まれのレビ人で、使徒たちにバルナバ（訳すと、慰めの子）

と呼ばれていたヨセフも、4:37 所有していた畑を売り、その代金を持って来て、使徒たちの足もとに置いた。」

バルナバという人が、畑を売って、その代金を、寄附した、すなわち、使徒達の足下に置いたという報告です。このバルナバの例をルカがあげた理由は、一つには、アナニヤとサッピラに並べる意図があったわけですが、この教会の具体的な活動報告を終わって、8 章からはパウロの活動に話しは移りますので、パウロに非常に関係のあったバルナバの例をあげる必要があったということもあると思います。

このバルナバについてですが、私の非常に主観的な話しになると思いますが、パウロよりも人格者であったと思うことがあると言うことを言いたいと思います。

他の聖書の箇所にも出てくるので(特に「使徒の働き」)、少し、彼についてお話しします。

彼は、名前の意味が「訳すと、慰めの子」とありますが、彼は、慰めの人、愛の人、面倒見のいい人でした。

というのは、「パウロより・・」と言いましたが、そもそも、彼は、パウロが、世に出て用いられていく時に最初に、彼を手伝った人なのです。

彼は、「キプロス生まれのレビ人」であってと書かれていますが、エルサレムのユダヤ人クリスチャンともつながりがありました。

パウロを手伝ったというのは、パウロは、そもそも、このあと、ステパノを殺すために段取りした、クリスチャンの敵でした。詳しいことは省きますが、その彼が、クリスチャンとなったのです。エルサレム教会は、パウロの扱いにこまりました。たとい、クリスチャンとなったとしても、かつてクリスチャンを殺した事に深く関わった人です。もしかしたら、クリスチャンになったふりをしているだけで、スパイとなって、クリスチャンを根こそぎ捕まえようとしているのかもしれません。その時、エルサレム教会が考えたのは、バルナバを彼につけて、彼にパウロという人物は見極めさせたのです（9:27「バルナバはサウロ(パウロ)を引き受けて・・」)。バルナバは、パウロから聞いた事を信じて、彼を教会は引き受けていいと、エルサレム教会に推薦したのです。

ただ、まだ信用ならなったのかも知れません。エルサレムからはるか北にある、アンテオケにパウロは、止めおかれます。そこは、バルナバの故郷、キプロス島のすぐ近くです。ここにも、バルナバの配慮があったのかもしれません。ギリシャのキプロス島から、アンテオケには、多くの異邦人が来ていて、そこで、多くの異邦人が救われます。そのことがエルサレムに報告されると、もしかしたら、厄介者のパウロには、これしかない奉仕だと、あるいは、ここで彼をエルサレム教会は試そうとしたのか、パウロをキプロスの伝道に遣わすのです。これが、豊明希望チャペルをはじめ、世界のすべての異邦人のための、最初の伝道になるのです。最初の異邦人伝道は、ペテロが示され、また、さらには、パウロが遣わされたからだと、教会書的には書かれるのですが、こうした経緯をみると、パウロを引き取り、彼をエルサレム教会に紹介し、自分の故郷でもあるキプロスに、バルナバも伴って、パウロが派遣されたというのは、すくなくとも、パウロの最初の異邦人伝道は、バルナバなくしてはありえなかったということがわかります。

こう見てくると、バルナバの奉仕は、バルナバでしかなし得なかった重要な奉仕であり、神が、求められた奉仕であったということがわかるのです。単に、バルナバのことは、お金の事も、そして、何より、こうした奉仕であったことを思うのです。

さて、ここまで見てきました。ここまでで思うことは、教会は、一人一人のクリスチャンの奉仕によって立つということであり、教会は、またその宣教は、むしろ、バルナバのような信徒によってこそ進み、信徒によってこそ立つと言うことではなかったでしょうか。あ、ちなみに、私も正しい意味で、牧師である前に、ひとりのクリスチャンであり、信徒であると思っています・・・

今週の歩み、私達は、常に、私には、神さまのため、兄弟姉妹はもとより、多くのこれから救われるべき方々のために何が出来るだろうかと考え祈り、進む者でありたいのです。そして、神様に愛されている私達が、大胆に神に仕え、人に仕える奉仕を実践していく歩みでありたいと願います。